

クズで愚かな王太子、都合のいい女は卒業です。

ヴィンセント

ライオットの兄で、
ロードラル王国の第一王子。
生まれつき魔法が使えないため、
王位継承権を剥奪され、
王城を追放されていた。

ポワレーヌ伯爵

父親のせいで領地が
機能不全に陥った中、家督を
継ぐことになった苦労人。

レイン

ヴィンセントの離宮を
警備する近衛兵。
剣術に長けている。

ライオット

ロードラル王国の王太子で、
サラサの元婚約者。
突然現れた聖女オフィーリアに
心移りし、「都合のいい女」と
見下していたサラサに対して
正妃を譲るように告げる。

オフィーリア

あらゆる傷や病を癒す
「治癒魔法」の使い手で、
「聖女」と呼ばれている。
可愛いから皆から愛されて
当然という考えを持つ。

サラサ

マリオン伯爵家の長女。
魔力を持たないため陰口を
叩かれてきた。長年尽くしてきた
婚約者ライオットに
裏切られたことをきっかけに、
本当の自分らしく生きるかと決意する。

序章

「この通りだ、サラサ。オフィーリアに正妃の座を譲って欲しいんだ」
蜂蜜のようにとろりと甘い声で懇願する婚約者。

サラサは心の内で溜め息をついた。

久しぶりに彼から茶会に誘ってくれたのも、この話をするためだったのだろう。
さほど驚きはない。

彼が突然現れた『聖女』に心移りしていたことは、薄々察していた。

マリオン伯爵家の長女サラサと、ロードラル王国王太子ライオット。

二人が婚約をしたのは、サラサが八歳の時だった。

サラサの祖父にあたる先代マリオン伯爵は、かつて文官を務めていたこともあり、先王とは懇意の仲にあった。

『初めまして、マリオン伯爵令嬢』

サラサより一つ歳上のライオットは、この頃から美青年の片鱗を見せていた。

さらさらとした金髪に、長い睫毛^{まつげ}に縁取られたコバルトブルーの瞳。まるで天使のような美貌の持ち主だった。

『あ、あの……お初にお目にかかります、ライオット殿下』

『ふふ。そんなに緊張しなくていいよ、僕だけの可愛いお姫様』

『はい……!』

その甘く優しい微笑^{ほほえ}みに、サラサは一瞬で恋に落ちた。それほどまでに、衝撃的な出会いだったのだ。

この方のために生涯を尽くそう。

そう心に誓ったサラサは、長年にわたって妃教育を受けてきた。

元々勤勉家だったおかげで、学ぶことは大して苦にならなかった。

家庭教師に「サラサ様は覚えるのが早いですね」と褒められたくらいだ。

しかし、決して幸せではなかった。

『マリオン伯爵家の娘が王太子妃ですってよ』

『非保持者の分際で、王室の一員になろうなんて』

『産まれてくる子供も非保持者だったら、どうするのかしら』

『魔法が使えない王子のご誕生か』

公の場に出る度に、周囲から聞こえてくる陰口。

この国の王族や貴族は、特殊なエネルギーである魔力を用いて『魔法』と呼ばれる不思議な力を

発動できる。

炎を起こし、水を生み出し、植物を成長させる。それらは、高貴な者の特権とされてきた。

だが稀に魔力を持たず、魔法を一切使えない非保持者がいる。

サラサもその一人だった。

祖父はいつも『魔法など使えなくても、お前は立派な人間だ。だから気に病む必要はない』と慰めてくれたが、貴族たちの風当たりは強かった。

魔法が使えない。

たったそれだけで、すべての努力を否定される。

その事実、サラサの心を深くえぐった。

自分のような人間に、王妃が務まるのだろうか。

不安で押し潰されそうになり、一度だけライオットに相談したことがあった。

『君は将来、王太子妃になる女性だ。この程度の重圧に耐えられなくてどうするんだい?』

『あ……』

呆れたような物言いに、サラサの顔から血の気が引いていく。

彼を失望させてしまった。心臓が嫌な音を立てて、上手く呼吸することができない。

『ライオット殿下、私……っ』

『でも、君ならきつと乗り越えられる』

白い手袋をした両手が、サラサの右手をそっと包み込む。

布越しに伝わってくる体温に、サラサの表情が幾分やわらいでいく。

コバルトブルーの瞳が、サラサをじっと見つめる。

『僕の愛しい婚約者。たとえ世界中を敵に回したとしても、僕だけは君を信じてるよ』

ライオットはサラサに顔を寄せると、額に柔らかな口づけを落とした。

『はい……！』

こんな情けない自分をライオットは信じてくれる。

サラサは安堵^{あんど}で涙ぐみ、ゆつくりと頷いた。

（ライオット殿下に愛想を尽かされないようにしなくちゃ）

この日を境に、サラサはまた一つ強くなった。

何を言われても、何を聞いても、決して笑みを絶やさない術^{すく}を身につけた。

やがて、サラサはライオットのすべての執務を任されるようになった。

『将来のためにも、今のうちに仕事を覚えていた方がいいからね』

婚約者に頼られている。それはサラサにとって何よりの喜びだった。

だが、互いの祖父がこの世を去った頃からだろうか。

ライオットはサラサと距離を置くようになった。

侍従経由で執務を頼まれることが増え、顔を合わせる機会もめっきり減ってしまった。

（ライオット殿下も公務で忙しいのですね）

サラサは寂しい気持ちを押し殺して、何度も自分にそう言い聞かせた。

そんなある日、辺境領の視察に行ったライオットは、一人の少女を王宮に連れ帰ってきた。

少女の名はオフィーリア。

辺境の教会で神官長を務めており、平民にもかかわらず魔力を保持しているということだった。

『私、オフィーリア・カラティンと申します。よろしくお願いします！』

美しい銀色の髪と、柔らかな常磐色^{とぎわいろ}の瞳。

一見すると儂げな大人の女性に見えるが、中身は子供のように幼かった。

『オフィーリアは、あらゆる傷や病を癒すことのできる治癒魔法の使い手だね。「聖女」と呼ばれ

ているんだ。彼女にぴったりの呼び名だろう？』

ライオットはそう言って、オフィーリアの腰に手を回した。

彼女も頬をほんのり染めるだけで、嫌がる様子はない。

（何なの、この子……）

サラサが複雑な思いを抱いていると、常盤色の瞳がこちらを見つめていることに気づいた。

『サラサ様のネックレス、とっても綺麗ですね』

『え？ ええ……ありがとうございます』

『でも、私の方が絶対に似合うと思うんです！ 私に譲ってくださいませんか？』

『はい？』

突然の申し出に絶句してしまう。

言葉を失うサラサを見て、ライオットが大きく溜め息をついた。

『サラサ、何をボートとしているんだい？ オフィーリアがこう言っているんだから、早く渡すんだ』

『わ、分かりました……』

サラサは言われるがままに、身に着けていたネックレスを外す。困惑しながら差し出すと、オフィーリアは零れるような笑顔を見せた。

『ありがとうございます！ サラサ様つてとっても優しいんですね。大好きになっちゃいました！』
そう言われても、素直に喜べなかった。

それから程なくして、オフィーリアはある公爵家の養女となった。

この頃から、彼らは二人で出かける機会が増えていった。

近い将来、自分は捨てられるのだろう。

いつしか、サラサはそんな確信めいた予感を抱くようになった。

(それでも私は……)

生まれて初めての恋をこんな形で失いたくない。絶望感に押し潰されそうになりながらも、ライオットを信じ続けた。

きつと、自分の隣に帰って来てくれるはずだと。

しかし、その思いが報われることはなかった。

「……承知いたしました」

「本当にいいのかい？」

「ええ。私よりオフィーリア様の方が王太子妃に相応しいでしょうから」

無理矢理にでも納得するしかない。非保持者のサラサに味方する者などいないのだから。

「君ならそう言ってくれると信じていたよ」

ライオットは自慢の金髪をさらさらと揺らし、心の底から嬉しそうに笑った。

もはやサラサに対する気持ちなど、微塵も残っていないのだろう。

そのことについて、責めるつもりはない。

(この十年間、いい夢を見せてもらったわ)

泣くのを堪えて、サラサは精一杯の笑みを浮かべた。

「ライオット殿下、今までありがとうございます。どうかオフィーリア様とお幸せになってください。婚約解消の手続きは後ほど……」

「は？」

ライオットが形のよい眉をひそめる。

「何を言っているんだい？ 君との婚約は解消しないよ」

「ですが、殿下はオフィーリア様とご婚姻なさるのでは……」

「王族は重婚も可能だ。妃教育で何を学んだのかな？」

人を小バカにしたような物言いが、サラサの心に突き刺さる。

「君には側妃になってもらう。そして、僕たちを陰から支えるように。分かったね？」
「え？」

「どうやら今まで通り、自分の執務をサラサに押しつけるつもりらしい。」

「ああ、オフィーリアの仕事も任せるよ」

「しかも、オフィーリアの分まで。」

（どうして私がこんな仕打ちを受けなければならないの？）

ライオットの思惑に気づいた瞬間、サラサは怒りで体が熱くなるのを感じた。

「僕のことを愛しているんだらう？　僕の役に立てるなんて、最高じゃないか」

その言葉を聞いて、ライオットへの愛情が霧散していく。

最高？　どの口が言うのだろう。

こんな男にすべてを捧げるなんて、ばかばかしい。

「サラサ、頼りにしているよ」

甘い囁き声も、もはやサラサの心に届くことはない。

……卒業だ。

都合のいい女は今日限りで卒業だ。

「ありがたいお話ですが、ご遠慮させていただきます」

清々しい笑みを浮かべ、サラサは生まれて初めてライオットに逆らった。

「……………何だって？」



ライオットが信じられないといった顔つきで、サラサの顔をじっと見つめる。

「君は自分が何を言っているのか理解しているのかな？」

「ライオット殿下の側妃になるのはお断りします、と申し上げました」

「な……っ」

ライオットは長い睫毛^{まゆげ}に縁取られた目を大きく見開いた。

（私がこんなふざけた提案に乗ると、本気で思っていたのかしら）

それだけサラサを軽んじていたのだろう。盲目なまでにライオットに尽くしてきた自分が、ばかみただ。

「せ、正妃の立場をオフィーリアに奪われて拗ね^すているのかな？ 君の気持ちも分からなくもないが、これはもう決定事項だ。父上や宰相たちも、その方向で動いている」

「どうぞ、ご自由になさってください。私も殿下との婚約を解消させていただきますので」

「……僕たちの結婚は王命によるものだ。君にそんな権限はない。逆らうならば、不敬罪と見做^{みな}されるぞ」

ライオットが怒気を含んだ声で凄んだが、今のサラサには怖くもなんともない。

第一、彼はとても大事なことを忘れている。

「確かに私たちの婚約は、王命で決まったものです」

「だろう？ いい加減わがままを言うのはやめ……」

「ですが、どちらかの不義が発覚した時は婚約の解消を認めると、婚約証明書に記載されています。

殿下も覚えていらつしやいますよね？」

「……っ！」

サラサが念を押すように尋ねると、ライオットの顔に動揺の色が浮かんた。

「ぼ、僕とオフィーリアはまだ清らかな関係だ。不義を働いたとは言えないな」

そう言い訳しながらも、コバルトブルーの瞳は泳いでいる。

婚約者がいる身で、他の女性を正妃にすると宣言した。誰が聞いても不道德な行為に違いない。それは本人も自覚しているようだ。

「それでは、私はそろそろ失礼いたします。両親にも、この件を伝えなくてはなりませんので」

「待つんだ！」

立ち上がろうとするサラサを、ライオットが焦った様子で引き留めた。

「側妃の何が不満なんだい？ 僕の妻に……王太子妃になれるんだ。光栄だと思わないのか……？」

「ええ、ちつとも！」

晴れやかな笑顔で答える。

虚勢^{きよせい}などではなく、紛れもない本心だった。

サラサは今度こそ席を立ち、カーテシーをしてから退室する。

「サラサ！ 話はまだ終わっていないぞ！」

部屋の中から怒鳴り声が飛んできたが、サラサが立ち止まることはなかった。

廊下を進む足取りは軽やかで、唇^{くちびる}は緩やかに弧を描いている。

（心機一転。これからは自分のためだけに、尽くしていきましょう）
そして、最高の幸せを手に入れて、その姿をライオットに見せつけてやる。
それがサラサの思いついた、ささやかな復讐だった。

第一章 都合のいい女は卒業

サラサは自室に戻ると、早速私物の整理を始めた。

文房具にお気に入りの本、衣類などを手早くまとめていく。

「……あら？」

銀細工のジュエリーボックスから装飾品がいくつか消えている。それも、ブルーダイヤモンドのネックレスやエメラルドのイヤリングなど、特に値が張るものばかり。

（誰の仕業かしら）

作業を中断して頭を巡らせていると、部屋の扉が叩かれた。

ライオットではないだろう。彼ならノックもなしに入ってくるはずだ。

「どうぞ、お入りください」

そう返事をする、扉がゆっくりと開く。

「サラサ様っ！」

中に入ってきたのは麗しの聖女だった。

「……オフィーリア様、私に何かご用でしょうか？」

「私、サラサ様にお願ひしたいことがあるんです」

「お願い？」

「ライ様から婚約解消のことを聞きました。あの……やっぱりライ様の側妃になっていただけないでしょうか？」

何を言い出すかと思えば。

予想外の『お願い』に、サラサは呆れ顔になる。

「サラサ様は私にとってお姉様のような存在なんです。ライ様もサラサ様がなくなったら寂しいとおっしゃっていました。ですから、ライ様と結婚してください！」

目を潤ませ、必死に懇願してくるオフィーリア。

ライオットの言葉を何の疑いもなく信じているようだ。

彼が欲しいのは妻ではなく、使い勝手のよい駒だというのに。

「優しいお言葉、ありがとうございます。ですが何を言われようと、私の気持ちは変わりません。どうかお引き取りください」

「で、でも、サラサ様がなくなったら……っ」

「私がいなくても、オフィーリア様なら殿下を支えられるはずですよ。あなたは聖女なのですから」

サラサは優しく微笑み、心にもないことを言った。

オフィーリアに王太子妃が務まるとは到底思えない。
様々な問題がライオットとオフィーリアに降りかかるだろう。
ただし、そのことを本人たちに指摘するつもりはない。

これもまた、サラサのちょっとした復讐である。

「ひどい……っ、私とライ様はサラサ様を家族だと思っているのに、どうしてそんなことを言うんですか!？」

オフィーリアの両目から大粒の涙が零れ落ちる。

この時、サラサの視線は彼女の胸元に注がれていた。

「……そちらのネックレス、オフィーリア様によくお似合いですね。ブルーダイヤモンドでしょうか？」

「あ、本当ですか？　ありがとうございます！」

サラサに褒められて、オフィーリアはびたりと泣き止んだ。

「ですが、そのネックレスは私の私物です。何故あなたが着けているのですか？」

意外と早く犯人が見つかった。

ライオットのお気に入りである彼女なら、城内をある程度自由に歩ける。サラサの部屋にも勝手に入り込んだに違いない。

「え、えっと……」

サラサの問いに、オフィーリアは表情を曇らせた。

「サラサ様の物は、妹である私の物でもありますよね？　それにこのネックレス、とっても気に入ってるんです。すぐに返せと言われましても……」

ネックレスを守るように両手を胸に当てて、後退りをする。

罪の意識がないどころか、そもそも盗んだという自覚がないようだ。

こんな倫理観で、よく神官長が務まったものである。

「……でしたら、そちらはあなたにお譲りいたします」

「本当ですか？　ありがとうございます！　あ……もしよろしければ、サファイアの指輪もいただきませんか？」

流石は聖女。常人とは異なる思考回路をしている。

「ええ。もちろんどうぞ」

どうせ、すべてライオットから贈られた物だ。手放すことに抵抗はなかった。

その後も「あのう、この指輪も……」「あつ、こっちのプレスレットも！」と散々ねだられ、面倒になってジュエリーボックスごと渡した。

「ありがとうございます、サラサ様！　大事にしますね！」

嬉しそうに部屋から出て行く聖女を、サラサは無言で見送った。

（私もそろそろ行きましょうか）

大きなトランクケースに私物を詰め込んで、数年間暮らした部屋を去る。

薄暗い回廊を歩いていると文官や侍女とすれ違ったが、彼らはサラサを一瞥するだけだった。

（私がこんな扱いを受けていても、ライオット殿下は何もしてくださらなかった）

サラサは城内の人々からも、非保持者として冷遇されてきた。

顔を合わせても、無視されるのは当たり前。

世話係の侍女にも邪険に扱われていた。

努力を続ければ、いつか彼らも認めてくれる。そう信じてずっと耐えてきた。

そんな窮屈な生活も今日でおしまい。

サラサは鼻唄を歌いながら王宮を去った。



「殿下との婚約を解消するだど？　お前は何を考えているのだっ！」

突然実家に戻ってきた娘に、父——マリオン伯爵は顔を真っ赤にして詰め寄った。

「お前が殿下と婚約できたのは、父上が先王に掛け合ったおかげなのだぞ！　そのことを忘れたのか!?」

「いいえ、覚えていますわ。お祖父様には感謝しております」

サラサは落ち着き払った声で答える。

気に入らないことがあると、すぐに子供のように癇癪を起こす。

父は昔からそんな男だった。そのせいで領民だけでなく、同じ貴族からも毛嫌いされているというのに、本人はそれをまったく自覚していない。

「大体、側妃の何が不満だというのだ！　殿下の伴侶であることに変わりはないだろう！」

「そうよ、サラサ。早くお城に戻って殿下に謝罪なさい。今ならまだ許してもらえるかもしれない

わ！」

母も今にも泣き出しそうな顔で、サラサを説き伏せようとする。

両親は王家との結びつきが失われることを何よりも恐れているのだ。

この状況で側妃になっても、マリオン伯爵家に旨味はないのだが、二人はそのことが理解できないらしい。

一度王室に入ってしまったえば、こちらのものだと思いでいる。

「非保持者のお前などに選択肢があると思うな！ 大人しく王太子に従ってればいいのだ！ それができないというのなら……」

「私を勘当なさいますか？」

「当然だ。お前のような娘など、我が家には不要だからな」

しおらしい態度で尋ねた娘に、父はニヤリと笑った。

「そうよ、サラサ。あなた自身のためにも、考え直してちょうだい」

あなた自身のため。

母が放った言葉に、サラサは声を上げて笑いそうになる。

サラサは幼い頃から、両親に『無能』と蔑まれ、使用人たちからも冷たい仕打ちを受けてきた。唯一庇つてくれたのは、数年前に亡くなった祖父だけ。

この屋敷にいる誰もが、サラサのことを見下しているのだ。

それが大きな過ちであると気づかずに。

「分かりました。それでは、どうぞご遠慮なく勘当なさってください」

というわけで、まずは彼らに身の程を知っていただくことにする。

「ふんっ。親に向かってよくそんな生意気な口を利けたものだ。本当にお前をこの家から追放してもよいのだぞ？」

「お父様は本気よ。バカなことを言わないで、今すぐ城に戻りなさい」

サラサが少しでも反抗的な態度を取ると、昔から決まっとうして脅してきた。

反省を促すためと言って、真冬の夜に屋敷から追い出したこともある。

屋敷に戻ることを許されたのは、その翌日。

サラサは高熱を出してしまい、数日寝込むことになった。

あの時は祖父が遠方に向いていたせいで、助けてくれる者は誰もいなかった。

「ええ。ですから、後腐れなくバツサリと縁を切ってくださいませ。私も実家に居着いて、あなた

方のご迷惑になりたくありませんもの」

苦い記憶を思い返しながら、サラサは柔らかに微笑む。

「困るのはお前だぞ？ 何の後ろ盾もない小娘が、たった一人で生きていけるわけが……」

今まで威勢のよかった父に焦りが見え始める。自分から言い出した手前、引くに引けないのだらう。

しかし彼は理解しているのだ。

サラサを勘当することで、この家がどうなるのかを。

「あなた、何を弱気になっているの？ 二度と私たちに逆らえないように、もつと強く言わなくちゃダメよ」

何も気づいていない母は、尚も娘に対する高圧的な態度を崩そうとしない。

「い、いや。あまり強い態度で迫っても、かえって逆効果かもしれん。ここは穩便おんびんに話し合うべきだ」

「こんな何の才能もない娘にへりくだれと言うの？ エミールが聞いたら、笑う……」

「お前は黙っているっ！」

呆あきれたように肩を竦すくめる母に、父が怒鳴り声を上げる。

雲行きが怪しくなってきたとようやく悟ったのか、母は「どういうこと？」と不安そうに問いつける。

この辺りで、サラサは説明してあげることにした。

「お母様、この家の事務作業をこなしているのは私ですよ。そのことをお忘れですか？」

「あ……」

母の口から細かい声が漏れる。

気づくのが遅い、とサラサは小さく息を吐いた。

「もちろん、すべてというわけではありませんが」

それでも八割方は、サラサが担っている。

順調だった領地の運営も、先代である祖父が亡くなると途端に傾き始めた。

プライドの高い父は、自分に領主としての適性がないことを認めようとしなかった。

しかも努力が嫌いな男なので、運営のノウハウを学ぼうともしない。

その結果、父は娘に領地運営を押しつけるようになった。

王宮に大量の書類を送りつけ、サラサに仕事を丸投げしてきたのだ。

「先ほどの言葉をそっくりそのままお返しいたします。私を追い出すのは構いませんが、そうならば困るのはあなたの方ですよ」

「うっ……」

父は何も言い返せない。

サラサがいなくなれば、領地運営は立ち行かなくなる。

それを分かっているながら、高圧的な態度を取っていたのだ。

(調子に乗りすぎましたね、お父様)

マリオン伯爵家の実質的な支配者はサラサである。

「い……いい加減になさいっ！ 自分の親を脅すなんて何を考えているの!？」

母が金切り声を上げたが、サラサの心にはこれっぽっちも響かない。

「脅すだなんてとんでもございません。私はただ忠告しているだけです。それでもお分かりいただけないようなら、ここを出て行くしかなさそうですね……ですが領地運営に関わる私の仕事を、どなたが引き継ぐのでしょうか」

サラサがわざとらしく溜め息をつくとき、母の表情が引き攣つった。

若い頃から遊んではかりだった彼女に、夫の手伝いなどできるはずがない。優秀な長男を頼れば最悪の事態は避けられるだろうが、今までのような生活は送れなくなる。

「ま……待つてちょうだい。勘当の話はなしよ。ね、あなた？」

「あ、ああ。お前はもう大人だ。自分のことは自分で決めなさい」

父も愛想笑いを浮かべて母に同調する。

これからも榮をして生きるために、自分たちが虐げてきた娘に媚びる。

それが伯爵夫妻の答えだった。

「ありがとうございます。お二人にはご理解いただけると信じておりました」

それでも、両親にはしっかりと痛い目を見てもらうが。

マリオン伯爵邸にサラサが帰ってきたことに、使用人たちは戸惑っていた。

初めのうちはとうとう王太子に捨てられたと思っていたが、どうも様子がおかしい。

伯爵夫妻は娘を叱りつけるどころか、優しく接している。

いや、媚びていると言うべきか。

そして使用人たちにも、「決してサラサの機嫌を損ねてはならない」と命じた。

「サラサがいなくなったら、我が家は何かも立ち行かなくなってしまう。そうならば、私たちは路頭に迷うことになるぞ……」

伯爵はこの世の終わりのような顔でそう語った。

一族の当主を名乗っていたこの男は、言わばお飾りのような存在だったのだ。

実際にマリオン伯爵家を動かしているのはサラサ。

父親は娘に頼り切りの役立たず。

「し、しかしサラサ様だって勘当されたら行き場がないじゃありませんか。ここまで下手に出なくたって……」

「恐らく本当に縁を切られたら、隣国にでも渡るつもりだったのだろう。あちらには我が家の元家庭教師がいる。あの男はサラサを高く評価していたからな」

住居や仕事を探すことなど容易だろう。

複数の言語を使いこなせるサラサなら、引く手あまたに違いない。

サラサはその気になれば、すぐにでもマリオン伯爵家を切り捨てられるのだ。

「そ、そんな……」

使用人たちも事の重大さに気づいて、みるみる青ざめていく。

「だからね、サラサを絶対に怒らせないようにしてちょうだい。ほら、あなたたち、昔あの子に冷たく当たっていたでしょう？」

遠回しに責めるような物言いに、その場の空気がひりつき始める。

「何をおっしゃるんですか。サラサ様を率先して虐めていたのはあなた方だ」

「そうですよ。サラサ様を庇えばこちらまで睨まれると思ひ、仕方なく同調していただけです」

「まるで、私たちだけが悪いような言い方はやめてください！」

「自分たちはろくに働きもせず遊び呆けていたくせに……」

「サラサ様がいれば、お二人は必要なのでは？」

横柄な振る舞いをする伯爵夫妻には、日頃から不満を抱いていたのだ。使用人たちは口々に文句を並べ立てていく。

「お、お黙りっ！ あんたたちなんか、サラサに言い付けてクビにしてやるわ！」

「そうだ！ サラサが真っ先に切り捨てたいのは、貴様らのはずだからな！」

伯爵夫妻が顔を真っ赤にして叫ぶ。

その幼稚な物言いに、使用人たちは一層声を荒らげた。

「バカ言え！ サラサ様が一番憎んでいるのは、あんたたちに決まってるだろ！」

「あんたらこそ屋敷から追い出してやる！」

自己保身のために互いに責任をなすりつけようとしている。

そんな不毛な言い争いを、サラサは部屋の外でこっそり聞いていた。

（申し訳ありませんが、出て行ってもらうのはあなた方全員ですよ）

サラサがそう思っていることなど、誰も知る由もなかった。



サラサが城を出て行ってから早十日。

ライオットは外出することなく、執務室にこもりきりだった。

「はあ……」

美しい顔に憂い^{うれ}を漂わせ、小さく吐息を漏らす。

今まではサラサに押し付けていた仕事を、自分で片づけることになってしまったからだ。

（くそ……一向に終わらない）

どう考えても一人でこなせる量ではない。

文字と数字ばかり見ているせいで目が疲れてきたし、肩も凝ってくる。

国王に即位すれば仕事量はさらに増える。

この先のことを考えて、ライオットはますます気が重くなった。

（今日はオフィリアと城下町の喫茶店に行く予定だったのに、何故私はひたすら仕事をしているんだ！）

苛立ち^{いらだ}を込めて机を思い切り叩いたが、心はちっとも晴れない。

（オフィリア……私と会えなくて寂しがついていないだろうか）

愛しい婚約者は、王宮で暮らすようになってまだ日が浅い。

だから彼女が新しい生活に慣れるまでは、常に傍^{そば}にいてやりたい。

起床時と就寝時は必ず口づけを交わし、午後は二人で庭園や城下町を散策する。

そして夜は一つのベッドで抱き合って眠りに就く。それがルーティンだった。

昨夜の恋人の姿を思い返して、つい頬が緩^{ゆる}んでしまう。

（おっと、僕は昼間から何を考えているんだ）

オフィーリアのことを頭の中から一旦追い出すと、あの忌々しい元婚約者の姿が思い浮かんだ。

（サラサめ……まさか本当に婚約の解消を申し出るとは）

サラサが実家に帰った数日後、婚約解消を望む書状が国王宛てに届いた。

ライオットがそれを知った時には既に手続きが終了していて、サラサとは赤の他人となっていた。

ライオットは国王に婚約解消の撤回を求めたが無駄だった。

『僕は元より、非保持者の小娘を王室に迎え入れることに反対していたのだ。所詮は父上と先代マリオン伯爵の間で、成り立っていた婚約に過ぎん』

『し、しかし私はオフィーリアだけでなく、サラサのことも愛しているのです！ これからはもっと彼女と向き合うつもりで……』

『お前はサラサを傍に置くことで、オフィーリアが不安を抱くとは考えないのか？』

咄嗟についた嘘も逆効果となり、ライオットは引き下がるしかなかった。

（……まあ、どうせすぐに私のところへ戻ってくるか）

今頃は、実の両親にこき使われているに違いない。

耐え切れなくなつて逃げてきた時は、使用人として雇うつもりでいる。二度と逆らえないように厳しく躡けてやるのだ。しかし、今すぐに以前の生活に戻るにはどうすればいいのか。

仕事そっちのけで頭を巡らせていると、扉をノックする音が聞こえた。

「あの……ライ様、入ってもよろしいですか？」

不安そうな声に、ライオットは大きく息を呑んだ。

慌てて扉を開くと、愛する少女が胸に飛び込んできた。

「お仕事なのにごめんなさい！ 寂しくてライ様に会いにきました……」

おずおずと見上げてくる婚約者の姿は、ライオットの胸を甘く高鳴らせた。

「謝らないでくれ、オフィーリア。私も君に会いたいと思ってたんだけ」

「本当に？ 嬉しい……っ」

オフィーリアは目を潤ませ、嬉しそうに微笑んだ。

「あ……ライ様、お疲れみたいです。今、元気にしてあげます！」

オフィーリアが目を閉じて魔力を集中させる。純白の光が螺旋状となり、ライオットの体を優しく包み込んだ。

瞬く間に体の疲れが取れて、活力が湧いてくる。

これが聖女の治癒魔法だ。

「ありがとう。君のおかげで残りの仕事も頑張れそうだ」

「やっぱりまだお仕事があるんですね。私、寂しいです……」

悲しそうに目を伏せるオフィーリアに、ライオットはぐっと息を詰まらせる。

（いや、待てよ……？）

ふと、ある考えが浮かんだ。

この方法なら、彼女とずっと一緒にいることができるのではないか。

「オフィーリア、君に頼みたいことが……」

扉を叩く音がライオットの言葉を遮る。

「何の用だ。私は今、忙しいのだが」

低い声で返事をする、ライオットの侍従が心苦しそうな様子で顔を覗かせた。

「申し訳ありません。ですが、一応殿下のお耳にも入れておいた方がよろしいかと……」

侍従が硬い表情で報告を始める。

煩わしそうに耳を傾けたライオットだが、その表情は次第に強張^{こわば}っていった。

「サラサが……そんなバカな……!」

侍従からもたらされた情報。

それは、サラサがマリオン伯爵家の実権を握ったというものだった。

サラサの祖父が晩年暮らしていた別荘は、マリオン伯爵領の南方にある。

そこに荷物をすべて運び終え、サラサは一息ついた。

「皆様、ありがとうございます。おかげで助かりました」

「いいえ。私たちにできることなんて、これくらいしかありませんから」

サラサが感謝を込めて礼を言う、荷物運びを手伝ってくれた領民たちは照れくさそうに笑った。当初は業者に依頼するつもりだったが、別荘の近くに住む領民たちが「是非手伝わせて欲しい」と申し出てくれたのだ。

生前の祖父は彼らと親交が深かったらしく、よく酒盛りにも加わっていたそうだ。

妻を早くに亡くし、息子夫婦や孫とも会えずに孤独を抱えていたのだろう。

「あのボンクラ息子がいなくなってくれて、ほんと清々しますよ。あいつは俺らのことなんぞ、これっぽっちも考えてくれなかったし」

領民の一人が軽い口調で言うと、他の者たちも同調するように頷いた。

彼らの言うボンクラ息子がサラサの父親であることは、言うまでもない。

「いつも嫁と遊び呆けてばかりの贅沢三昧だったもんな」

「俺の友達がレストランやつてるんだけど、散々飲み食いして金も払わずに帰って行ったらしいぜ」

「大雨で川が氾濫した時も、何もしてくれなかったわよね」

「あの野郎、遊ぶ金欲しさに税金や医療費を上げやがって。うちのお袋は、そのせいでろくに治療も受けられずに死んじまったんだ」

領民たちの文句が止まらない。

父が彼らに心底嫌われていたことを、サラサは再認識した。

「でも一番最低なのは、先代のマリオン伯爵様を屋敷から追い出したことよ。実の父親に対する仕打ちとは思えないわ」

年配の女性は苦い表情で言った。

伯爵は自分の父親が病に倒れると、足手まといは不要とばかりに別荘へ追いやり、祖父はその後すぐに亡くなった。

非常識な行動が目立ち始めたのも、この頃からである。

（お祖父様への嫉妬もあったのでしょね）

経営学、政治学、経済学、農学、薬学……あらゆる学問に精通していた祖父は、ロードラル王国の頭脳と称えられていた。血の滲むような努力をし、確固たる地位を手に入れたのだ。

父はそんな祖父にコンプレックスを抱くばかりで、何もしようとはしなかった。

勉学に励んでいれば、何かが変わっていたかもしれないのに。

（どんな原石も磨かなかつたら、ただの石ころのままよ）

最後まで心を入れ替えることなく、父は家督を剥奪された。

瞼を閉じて、その時のことを思い返す。

数日前、サラサは両親の親族を手紙で呼び出し、今まで執務の大半をこなしていたのは自分であると明かした。

初めは信じようとしなかった親族たちも、書類や帳簿など証拠の数々を見せられると、表情を一変させた。

『クズすぎる……兄上には申し訳ないが、こんなバカ甥の存在そのものがマリオン伯爵家最大の恥だ』

祖父の実弟——叔祖父は甥夫婦の所業に深く息をついた。

『違うんだ、叔父上。私はサラサに仕事を与えることで、自己肯定感を高めてやろうと……！』

『お前は何をわけの分からないことを言ってるんだ……』

父を擁護する者はいなかった。

しかしロードラル王国では、女性の爵位継承は認められない。

そのため、家督はひとまず叔祖父が継ぐことになり、実質的な当主はサラサということになった。

『非保持者に当主が務まるはずがないだろう。ここはエミールに監督させて……』

父の身勝手な言葉に耳を傾ける意味はない。

最後まで聞き終えることなく、サラサは口を開いた。

『さようなら、お父様。今までありがとうございます』

サラサが笑顔で別れを告げると、父は観念したようにがっくりと項垂れた。

『わ、私はどうなるの？ ねえサラサ、あなたのために何でもするわ。だからお母様を見捨てないでちょうだ——』

『さようなら、お母様。今までありがとうございます』

しおらしく縋ってきた母にも、同様の言葉をかける。

母は「この親不孝者！」と喚いていたが、部屋の外へ追い出された。

その後、マリオン伯爵夫妻はそれぞれの親族に引き取られた。

こんな恥知らずども、市井に放逐してもいいのではないか。

そんな意見が多数だったが、サラサがそれに反対した。

『貴族が急に庶民として暮らすことなど不可能です。一ヶ月も経たずに命を落とすでしょう。……』

ですが、この方々が私の両親であることに変わりはないのです。どうかそれだけはおやめください』

簡単に死なせるくらいなら、何らかの形で社会に貢献させた方が世のためになる。そんな本心を隠してサラサが説得すると、親族は神妙な面持ちで同意してくれた。

『こんなクズどもを許すとは……君は優しい』

叔祖父^{おおじ}がしみじみと言うので、サラサは「そんなことありません」と謙遜した。

そんなわけで、両親は現在使用人として働かされている。

最低限の衣食住は保証されているが、給金は一切なし。

粗相^{そそう}をするとい日食事抜き、という過酷な日々を送っているらしい。

両親の次は、使用人全員を屋敷から追い出した。

増築に増築を重ねて無駄に大きくなった屋敷に、住むつもりなど毛頭ない。

『ほ、本気でございますか？ 私たちがいなくなったら、サラサ様のお世話をする者がいなくなりますよ』

『自分のことは自分でしますから、ご心配には及びません』

サラサにさらりと切り返され、使用人たちは全員黙り込んだ。

執事がいなくても仕事は滞りなく進むし、侍女がいなくても掃除や洗濯も問題ない。

新居となる祖父の別荘には、庭園がないので庭師も不要。

つまり、今のところはサラサ一人でなんとかなる。

別荘の警備も、叔祖父^{おおじ}の私兵に任せる予定だ。

彼らには退職金と再就職先を用意したが、伯爵領を去る者は多かった。

(主人の娘を虐^{いじ}めていた使用人として、名が知られているものね)

伯爵家で働いていることを鼻にかけ、好き勝手やっていた輩もいたようだ。もはや、この地に彼らの居場所はない。

自分の両親と使用人をまとめて追い出したサラサを、領民たちは温かく歓迎した。

この領地は農産物の収穫量が比較的多く、治安もさほど悪くはない。

だが、サラサも把握していない事態が起きていた。

(医療費を高くしすぎたせいで、診療所を利用する人が激減。診療所は廃業に追い込まれて、おまけに医薬品の輸入も減少……そのせいで、慢性的な薬不足が続いていた……これはどうということかしら、お父様)

サラサは父を張り倒したい衝動に駆られた。

医薬品の輸入を減らし、浮いた分を遊興費^{ゆうきょうひ}に充てていたのだ。

そのことに気づかれないように、父は医療関係の仕事だけはサラサに任せなかった。無駄に悪知恵の働く男である。

しかし、サラサの悩みの種はそれだけでは済まなかった。

程なくして、新たな問題が生じたのだった。

第二章 第一王子

「殿下、お仕事でしたら私がお引き受けします。殿下は聖女様のお傍そばにいて差し上げてください」
「オフィーリア様が心細い思いをなさっております。執務は私どもにお任せを」

「サラサは薄情な女だ。こんな時に王宮から去るなど……」

「マリオン伯爵令嬢は、魔力を持たない上に、美しさもオフィーリア嬢には遠く及ばないからな。女の僻ひがみは醜いものだ」

侍従や文官が仕事をすべて引き受けてくれるおかげで、ライオットは以前のようにオフィーリアと甘い時間を過ごせていた。

「オフィーリア、君のおかげだよ。本当にありがとう」

「そんな……私はただ、ライ様のおっしゃる通りにしていただけです」

オフィーリアがほんのりと頬を染めながら、目を伏せる。

なんて庇護欲ひごよくをそられる姿だろう。ライオットはコバルトブルーの瞳を細め、小柄な体を優しく抱き締めた。

（しかし、ここまで上手くいくとは。やはり私は天才なのかもしれないな）

王宮の男どもがオフィーリアを神聖視しているのは知っていた。

オフィーリアに挨拶されると、皆鼻の下を伸ばして締まりのない笑みを見せる。

邪よしまな感情を抱いている者も多いだろう。

そのような連中が、オフィーリアに「最近ライ様と一緒にいらなくて寂しい」と相談を受けたら？

ライオットの目論見は見事に成功し、現在に至る。

「でも私、嬉しいです。皆さん、私たちのことを応援してくれているんですね」

「そうだね。結婚式は盛大なものにしよう」

「はい。あ、でも……」

「どうしたんだい？」

「サラサ様……どうしているんでしょうか」

「ああ……」

近頃、サラサは自領の医療体制を整えているらしい。しかし女の分際でどこまでできるだろうか。（元婚約者のよしみで、泣きつかれたら助けてやろう。ただし側妃の役目を放り出した罰として、それなりの対価はいただくがな）

あの女には色々と分らせてやらねばならない。

自分に弱々しくさがりつく姿を想像して、ライオットはほくそ笑んだ。

「でも……でも、サラサ様ならきつと戻ってきてくれますよね？ だって、最後に会った時も私に優しくしてくれましたし」

オフィーリアは涙ぐみ、胸元のブルーダイヤモンドにそっと触れた。
ルビーの指輪。エメラルドのイヤリング。ブルーターコイズのブローチ。

オフィーリアが身に着けているそれらは、かつてライオットがサラサに贈ったものだ。
(城から出て行く際にオフィーリアに譲り渡したそうだが、その点だけは評価してやろうじゃないか)

装飾品は美しい者が着けてこそ、真の輝きを放つ。

「君は今でもサラサを慕っているんだね」

「はい！ 私のお姉様になる人ですから！」

あらゆる点において格下の令嬢にも、慈悲の心を向ける聖女。

オフィーリアの評判は国中に広まり、国民は王太子と聖女の婚約をこぞって祝福した。

その裏で、一部の人々はある事態に直面していた。

オフィーリアの妃教育が始まったのである。

当初、オフィーリアが元神官長であると聞いて、教育係たちは安堵あんどしていた。

元庶民に妃教育ほしこを施すなど、動物に人語を教え込むようなもの。

だが、かつて神官長を務めていた者なら、それなりの教養を身につけているだろうと、皆安心しきっていたのだ。

それは甘い考えだった。

「オフィーリア様、何度申し上げたら分かるのですか」

教育係が語気を強めて指摘すると、オフィーリアはスプーンを握り締めたまま首を傾げた。

「えっと……何がですか？」

「食事の最中は音を立ててはなりません。スープを飲む際は啜すするのではなく、食べるような感覚でスプーンを口に含んでください」

「でも、音を立てて飲んだ方が何だか美味しく感じますよ？」

「貴族社会ではマナー違反とされています。オフィーリア様は王妃として、すべての女性の手本となるのです。どうかご理解ください」

「分かりました……んっ、このパンとってもおいひいです！」

美味しそうにパンを頬張るオフィーリアに、教育係の眉間に皺しわが増える。

「口に物を入れたまま話してはいけません」

「えっ!? そしたら食事の時は、いつおしゃべりをすればいいのですか!？」

「……」

長年にわたって家庭教師を続けてきた教育係にとって、こんな突飛とつびな発言をした令嬢は初めてだった。農民上がりの男爵令嬢でさえ、ここまでひどくはない。

(これが……王太子妃に……?)

教育係の背中に冷たい汗が流れた。

オフィーリアの無知ぶりは、勉強面でも露呈した。

「こうして地図で見ると、ロードラル王国って大きいんですね」

「いえ。我が国はこちらでございます」

「えっ、こんなに小さいんですか!？」

「ロードラル王国は決して小国ではありません。アステイニア大陸の中でも、三番目の国土面積を誇ります」

「でも、一番ではないんですね……」

落胆の表情を見せる聖女に、教育係は溜め息をつきたくなった。

そして、またある時も。

「あのう……この言葉はなんて読むんですか？」

「ご自分で訳さなければ、勉強になりませんよ」

「は、はい……でも外国に行く時は、通訳の人も一緒なんですよ？ それなら、他の国の言葉なんて覚えなくたって……」

「完璧に習得しなくても、ある程度は話せるようにならなければなりません」

「そんなの絶対に無理です!」

「王太子妃になれば、他国に訪問することも多々ございます。とにかく勉強なさってください」

「ぐすっ……ひっく、うっ……ライ様助けて……!」

教育係は「泣きたいのはこちらだ」と呆れたように肩を竦めた。

オフィーリアの頭の悪さは教育係たちを愕然とさせた。

この調子では妃教育などともに進むはずもなく、あつという間に一ヶ月が経った。

「僕のオフィーリアを虐めたというのは本当かな？」

怒りを宿したコバルトブルーの瞳が教育係たちを睨みつける。

どうやら麗しの聖女は、愛する婚約者に助けを求めたらしい。

突然ライオットに呼び出され、一同は内心うんざりしていた。

虐めた覚えは一切ないこと。

オフィーリアは歴代の妃の中でも覚えが少々悪いこと。

そのため、多少厳しく接するのはやむを得ないこと。

教育係たちは、この三点を慎重に言葉を選びながら説明した。

しかし、ライオットを納得させることはできなかった。

それどころか。

「君たちの教え方が悪いだけじゃないのか？ それをオフィーリアのせいにするなんて……君たちは教育係失格だね」

いくら説明しても、ライオットは「オフィーリアは悪くない」という考えを改めようとしな

こちら、オフィーリアに負けず劣らずのバカである。

教育係たちの心が一つになった瞬間だった。

このままでは、一生妃教育は終わらない。

危機感を覚えた教育係たちは、国王に窮状を訴えることにした。

しかし、これも無駄に終わった。

「オフィーリアは貴族の生活にまだ慣れていないのだ。根気強く取り組んでくれ」
国王から返ってきたのは、たった一言だけ。

謁見室を後にした教育係たちは、長く息を吐いた。

「サラサ様が帰ってきてくだされば……」

誰かがぼそりと呟くと、彼らの間に重苦しい沈黙が流れた。

ロードラル王国始まって以来のバカ王妃が誕生するかもしれない。

その話題はたちまち王宮内に広まった。

「オフィーリア様には驚かされたわ。食事のマナーも知らなかったとか有り得ないでしょ」

「紅茶は味がしなくて美味しくないからって、甘いだけの果実水ばかり飲んでるわ。あれじゃあ、茶会に出るなんて絶対に無理ね。他の出席者たちの饗宴^{ひんげん}を買うか、笑いにされるだけよ」

「城に來たばかりの頃は、もっとひどかったわ。ノックもせずに部屋に入るのよ？ どんなに口を酸っぱくして注意しても、泣きながら謝るだけで全然直らないんだもの」

「いちいち泣くから疲れるって、教育係たちが愚痴^{こぼ}を零していたわ」

「あれで神官長が務まるなんて、田舎の教会ってよほど人材不足なのね。創造神様も泣いていると思っわ」

女性専用の談話室は、オフィーリアの話題で持ち切りとなった。

この事実を知ったライオットは怒りに震えた。

（オフィーリアを妬^{ねた}む者は多いだろうと思っていたが……）

庶民なのだから、貴族としての教養が身につけていないのは当然だ。

教会務めをしていたから勉学に励む余裕などあるわけがない。

少し考えれば分かることなのに、何故理解しようとしなのかい。

いや、理解した上でオフィーリアを蔑^{あやうす}んでいるのだ。

「うう、ぐすつ……ごめんなさい、ライ様……私、全然ダメで……」

「オフィーリアはダメじゃないさ。こんなに頑張ってるじゃないか」

大きな瞳からポロポロと涙を零^{こぼ}すオフィーリア。

その痛ましい姿に、ライオットは奥歯を噛み締める。

この日も教育係に激しい叱責を受けて、ライオットの部屋に逃げ込んできたのだ。

（元神官長であり、聖女のオフィーリアを蔑^{あやうす}めば天罰が下ることも分らないとは……教養がないのは彼女たちの方じゃないか）

ライオットは一粒の種子を握り締め、魔力を集中させる。

握った手をゆっくり開くと、そこには一輪の青い花が咲き誇っていた。

ライオットが保有しているのは木魔法。

ロードラル初代国王も持っていたとされる稀少性の高い魔法だ。

生命を司るという点では治癒魔法と似ている。

きっと、自分たちが巡り合ったのは運命なのだろう。

「安心してくれ、オフィーリア。君は僕が必ず守ってみせるよ」
ライオットは甘い微笑みとともに花を差し出した。

「ライ様……」

涙で頬を濡らしながら安堵の笑みを浮かべるオフィーリア。

その姿はどんな大輪の花よりも美しい。

（この笑顔を守り、二人で幸せになってみせる。それが僕の使命だ。そのために、まずはあの女たちを懲らしめなくては）

ライオットはただちに男の臣下を招集し、この現状を説明した。

「僕は彼女の幸福のためなら何でもする。君たちもそうだろうか？」

首を横に振る者はいなかった。

敬愛する聖女のために。

或いは、自身の出世のために。

臣下たちはオフィーリアの悪評を口にする者の排除に動き出した。

「エミール、君も頼むぞ」

「はっ。殿下の仰せのままに」

茶髪の青年がライオットに恭しく頭を垂れる。

マリオン伯爵家の嫡男であり、ライオットの侍従を務めるエミールだ。

「女は自分より格の高い人間を忌み嫌う性質があります。厄介で醜悪な生き物だ。……妹がいい例

ですよ」

忌々しそうに吐き捨てるエミール。

彼は以前からサラサを「出来損ないの妹」とあざ笑っていた。

そんな妹が伯爵家を牛耳るようになり、内心穏やかではないのだろう。本来であれば、マリオン伯爵家の家督はエミールが継ぐはずだったのだから。

（君が当主になれるよう、僕も協力は惜しまないよ）

エミールによる家督の奪取。それはサラサの失脚を意味している。

ライオットにとっても理想の展開だった。

王太子の命によって、オフィーリアを貶した侍女や女官は解雇となった。

（僕に泣いて許しを請う者もいたが、当然断ってやった。僕の大事なオフィーリアを傷つけたんだ。許してなるものか）

『害虫』の駆除を終え、ライオットは優雅な笑みを浮かべる。

教育係も自らの愚かさを悔いたのか、オフィーリアに優しく接するようになった。

そのおかげもあって、妃教育は少しずつ進み始めている。

食事のマナーに関しても、ゆっくり矯正していく方針に決まった。

（近頃オフィーリアは、食事をするのが辛いと言っていたからな。自分にとって美味しいと感じるものを食べて欲しい）

様々な悩みが解決して、ライオットは清々しい気分浸っていた。

そして、久しぶりに兄の顔を見に行こうとふと思いつく。

「オフィーリア、僕の兄上に会いに行かないかい？」

「ふえ？　ライ様ってお兄様がいらつしやったんですか？」

オフィーリアが小動物のようにこてんと首を傾げる。

兄が公の場に姿を見せるのは、建国記念の式典の時のみ。それも毎回ではない。

その名は新聞にも滅多に載らないため、オフィーリアが知らないのも無理はなかった。

「第一王子ヴィンセント。僕より二つ歳上で、現在はとある領地で自由気ままに暮らしている」

「あれ？　お兄様がいるのに、ライ様が将来王様になるんですか？」

「……兄上は、生まれつき魔力を持たない非保持者でね」

ライオットは長い睫毛を伏せて悲しげな表情を作る。

しかし内心では実兄をこき下ろしていた。

（非保持者の王子など王家の恥そのものだというのが、よくも自国にいられるものだ。厚顔無恥とは、まさに奴のためにある言葉だな）

まったく忌々しいことである。

（王位継承を狙っているかもしれないからな。そのために僕活躍を聞かせて、功績を語ること、奴の自尊心を削いでおかなくては！）

今回はオフィーリアや侍従たちも同行させる。

そうすることで、ライオットの権威を見せつけるのだ。

「可哀想な人なんですわ……私もヴィンセントお兄様に会ってみたいです！」

「ありがとう。兄上もきつと喜ぶと思うよ」

弟が聖女と結婚する。

その事実を知ったら、あの飄々^{ひょうた}としている愚兄も平静ではいられない。

ライオットの脳裏には、恥辱にまみれた兄の顔が浮かんでいた。

数日後。ライオットは一年半ぶりに兄が暮らしている離宮を訪れた。

まずは紅茶の一杯でもいただこうと思っていたが。

「久しぶりに来てくれたのに申し訳ないが、今日のところは帰ってくれないかな。もうすぐ客人が来るんだ」

「兄さん、何時間もかけて会いに来た弟に、それはないんじゃないか？」

「こっちの都合も聞かずに、突然押しかけられても」

ヴィンセントは軽く肩を竦めて笑った。

陰気臭い黒髪と暗い濃紺の瞳。

いつ見ても華やかさのない地味な男だと、ライオットは鼻を鳴らす。

（こんな男に客人？　どうせ、僕たちを体よく追い返すための作り話だろう）

突き刺すような視線を感じて振り向けば、兄の執事や侍女がこちらを睨みつけていた。まったく

立ち読みサンプル はここまで

礼儀のなっていない使用人たちである。

「こ、この人がヴィンセント……お兄様……」

「オフィーリア？」

ライオットは婚約者の異変を感じ取っていた。

先ほどから熱に浮かされたように顔を赤らめているのだ。

（もしかしたら風邪を引いたのかもしれないな。ヴィンセントに従うのは癪だが、今日は一旦帰って――）

コンコン、と扉を叩く音が聞こえた途端、使用人たちの表情が明るくなった。

客人が来るというのは本当だったらしい。

簡素な造りの執務室の扉がゆっくりと開いて――

「えへ。」

客人とライオットは、ほぼ同時に声を上げた。

「な、何故君がここに……」

驚きのあまり、声が震える。

侍従たち、特にエミールも目を大きく見開いている。

そこにいたのは、かつての婚約者だった。

「ヴィンセント様より、婚約の打診をいただいたのです。本日はそのお返事に伺いました」
静まり返る室内で、サラサは優雅なカーテシーを披露した。



マリオン伯爵家の当主となったサラサの頭を悩ませているもの。

それは、連日のように舞い込んでくる縁談だった。

「サラサ様、グローラ男爵家から書状が届きました」

「ええ、ありがとうございます」

近衛兵から分厚い手紙を受け取り、サラサは乾いた笑みを浮かべた。

グローラ男爵家からは、先日も次男との婚約の打診があったばかり。

女性関係の派手な人物で、婚約者のいる令嬢にも言い寄って相手の家を怒らせたと聞いている。

サラサにとっては一番の地雷物件だ。当然、丁重に断らせてもらったが。

（今度は三男……）

三男ならいけると思ったのだろうか。

長々と綴られた文章から必死さが伝わってくる。

こちらにも金遣いが荒く、賭け事にのめり込んで男爵家の資金に手をつけたという噂だ。

次男ともども、これでよく勘当されないものである。

（バカな子ほど可愛いとは言うけれど、子煩悩も外から見ればただの迷惑でしかないわ）

グローラ男爵家以外からも、縁談の書状は何通も届いていた。